

イチゴ‘まりひめ’における秋ランナーを用いた親株育成技術の確立 ～秋ランナー採取株の収量性評価～

1. はじめに

和歌山県が育成したイチゴ‘まりひめ’は、本県の主力品種ですが、炭疽病に非常に弱く育苗中の発病、枯死が問題となっています。

そこで、当試験場では、健全な親株育成のため、病原菌感染リスクが低い低温期に収穫株から発生したランナー（秋ランナー、写真1）を用いた‘まりひめ’親株育成方法の試験を行っており、農業試験場ニュース第144号では、効率のよい挿し苗方法について報告しました。

ここでは、収穫株からの秋ランナー採取が株への負担となり、収量や果実糖度へ影響しないか調査した結果を報告します。



写真1 収穫株から発生した秋ランナー

2. 材料および方法

場内の高設栽培ハウスで栽培している‘まりひめ’収穫株（2024年9月30日定植）において、10月末までに発生したランナーは全て除去し、11月以降に発生した秋ランナーを子株の展開葉数が3枚の時点で採取しました。試験区は、1株当たりの採取数0本、2本、3～4本の3試験区とし、設定本数採取後に発生したランナーは全て除去しました。栽培管理は、CO₂施用あり（400～800ppm）、日中換気温度 23～28℃、夜間加温温度 3～9℃で行い、3月末までの時期別収量と果実糖度を調査しました。

3. 結果

各月の収量は、いずれも試験区間で顕著な差はありませんでした（図1）。また、収穫開始から3月末までの総収量の比較でも有意な差は見られませんでした。

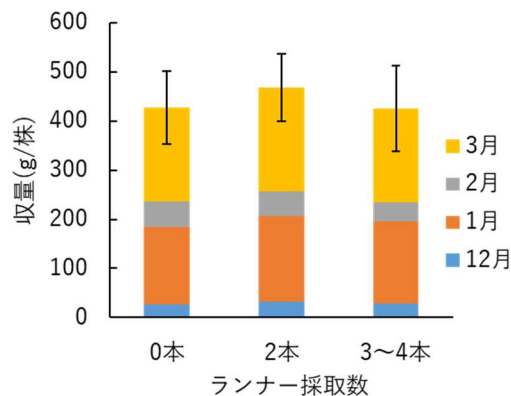


図1 ランナー採取数が収量に及ぼす影響

調査期間:2024年12月6日～2025年3月31日

調査株数:26～30株、バーは総収量の標準偏差を示す

各試験区の果実糖度は、Brix9.5～11.5の範囲内で2月に高くなり、3月に低下するという同様の傾向を示し、各月のBrixに試験区間で有意な差は見られませんでした（図2）。

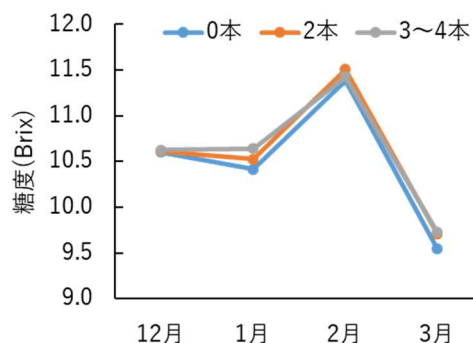


図2 ランナー採取数が果実糖度に及ぼす影響

調査期間:2024年12月16日～2025年3月31日

各試験区について12果/週を調査

各月の糖度に試験区間で有意差なし(Tukey検定)

4. おわりに

‘まりひめ’で秋ランナーを利用した親株育成を行う場合、1株から3～4本のランナーを採取しても収量等への影響は見られませんでした。ただし、1株からの採取数が多くなると、採取期間が長くなるため、多くの株から1～2本採る方がよいと考えられます。

今後、これまでの研究成果を取りまとめた「‘まりひめ’秋ランナー利用マニュアル」を作成する予定です。

（栽培部 小川大輔）